



「第3回トリエンナーレ豊橋 星野眞吾賞展 —明日の日本画を求めて—」より  
星野眞吾賞(大賞)「花」新恵美佐子

TOMO no KAI NEWS

Toyohashi City Art Museum

# FU 風伯 HAKU

# 金沢21世紀美術館に学んだこと

豊橋市美術博物館副館長 後藤清司

平成16年10月9日に金沢21世紀美術館が開館して、早1年、古都金沢にモダンなガラス張りの円形美術館ができるまでには、はるかな長い道のりがあったと聞く。



元々は、平成7年に石川県と金沢市が共同で都心地区整備構想を検討したことに端を発するが、その中で金沢大学附属小中学校跡地を金沢市が取得し、美術館を核とした複合的文化施設として整備する方向を打ち出した。

平成9年、美術館等基本構想を発表し、伝統文化に刺激を与え、新しい文化創造に寄与する市民主体の美術館と新たなまちの賑わいを創出する交流拠点としての複合施設と位置付けた。ひとつの文化施設の建設というより街づくりの核としての考え方が強く意識されたものとなったが、これは後の基本計画に色濃く打ち出されてくる。その後、金沢市が国より土地を買い上げ、本格的に建設が推進されていくことになる。

平成10年、「基本計画」が策定され、金沢の新たな文化創造と街の賑わいを創出する拠点とし、諸分野の交流を促進する施設という内容であった。

建設予定地周辺は、金沢城・兼六園といった正に加賀百万石を象徴する昔ながらの風景や石川県庁・金沢市役所といった官庁街、駅前商店街・近江町市場といった金沢市民の台所でもある。さらに県立美術館や歴史博物館・近代文学館といった文化的施設も隣接してある中で、どのような建物が出来上がるのだろうかという興味津々であった。

平成11年、設計者が妹島和世+西沢立衛のSANAAに決定。この頃は、「この建築家どんな人？」というの

が正直なところであったが、後に思わぬところで経歴などを知る事となる。さて、基本設計から実施設計に移る中で美術品の収集も併せて進んでいく事となった。また、市民を対象としたワークショップやレクチャーも数多く行われるなど美術館建設に向けて市民意識の高揚も積極的に行われた。

名称も金沢21世紀美術館と決まり、実施設計が完了する平成13年10月、私と大野俊治学芸員は豊橋・トリード交流展事業打合せで訪れたアメリカのトリード美術館で設計者・妹島和世さんの名前を聞く事となる。と言うのも、トリード美術館がガラスコレクションだけの美術館を建設することになっているが、その設計者が妹島和世さんであった。そして、今までの設計作品が飯田市にあるというのだ。これは、後に調べたところ小笠原書院という建物の隣に造られた展示施設であった。金沢21世紀美術館・トリードガラスミュージアム・飯田市小笠原書院展示館いずれも共通することがガラスをふんだんに採り入れた施設であるということだ。

さて金沢に戻るが、平成14年4月から16年6月にかけて美術館本体工事が行われた。建築概要が、地下2階・地上2階で延床面積27,920㎡、うち美術館が17,069㎡、残りは駐車場や工房となっている。美術館内には、スタジオやレストラン、シアターなどがある。

昨年暮に訪れた時、古都金沢の中にガラス張りで囲まれた円形的美術館を目にして、その存在感に圧倒された。

ただ、私自身の感想は年齢からかもしれないが長く滞在できない空間と感じた。

しかし、この美術館が提案する「伝統と現代」「文化と産業」「美術と観光」など公共文化施設の社会的な役割を問い直すということでは訪れる価値が十分あると感じた。また、建物も館の特色となっている「ガラス張りとする事で街とつながっていく美術館」「人の動きを作り出す透明な美術館」といった美術館建築のあり方を根本から問い直す絶好のものと思われる。

さらに、私たち豊橋市教育委員会が今後見習わなくてはならない「金沢市内のすべての小中学生（先生含め41,000人）が必ず来館するというミュージアムクルーズ構想」なるものにも注目させられた。

是非、一度訪れることをお勧めする美術館である。

第3回トリエンナーレ豊橋

## 星野眞吾賞展

—明日の日本画を求めて—

HOSHINO SHINGO PRIZE,  
THE 3rd TRIENNIAL COMPETITION  
IN TOYOHASHI  
SEEKING THE ARTISTS OF TOMORROW

平成17年

11/12[土] ▶ 12/11[日]

開館時間 ●午前9時～午後5時(初日は正午より一般公開)  
休館日 ●月曜日【観覧無料】

## 受賞者が決定しました

〈トリエンナーレ豊橋 星野眞吾賞展〉は、豊橋出身の日本画家・星野眞吾(1923～1997)が、後進の画家の支援と育成のために豊橋市へ私財を寄附したことに端を発し、創造的な制作活動を行う新進作家の発掘と顕彰を目的として3年に一度開催する日本画の全国公募展です。

3回目を迎えた今回は、全国から247点の作品が寄せられ、このうち審査によって選ばれた59点と過去の星野眞吾賞受賞者による賛助作品2点を展示します。

## ◆星野眞吾賞(大賞) 1点

「花」新恵美佐子さん(神奈川県横須賀市)

## ◆優秀賞 2点

「underground stem」

佐藤裕一郎さん(山形県山形市)

「生の記憶」三上研治さん(広島県大竹市)

## ◆入選・審査員推奨 5点

入選 51点

## 記念対談

11/12[土]午後2時～ 豊橋市役所13階 講堂

「星野眞吾の生涯と星野眞吾賞展の意義」

針生一郎氏(本展審査員長・美術評論家)

高畑郁子氏(星野眞吾夫人・創画会会員)



新恵美佐子

1963年大阪市生まれ。  
多摩美術大学美術学部  
絵画科日本画専攻卒業。  
同大学大学院美術研究科修了。



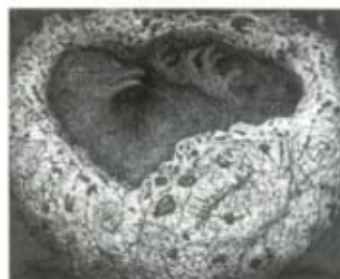
星野眞吾賞(大賞)「花」

【星野眞吾賞選評】 鮮やかなイメージの表われの奥に、どこか懐かしい心理の深い基層が感じられる。とともに、それを確実に表現する技法もまた確かで独自のものだろう。現代の超コミュニケーションのうねりのなかにながら、そこから漏れるものを掘り取ろうとする感触がある。

【新恵さんコメント】 常に作品に対して真摯でありたい、という思いで描いております。私の作品が多少でも評価されて、多くの方に見ていただけるチャンスが増えることは、ありがたいことです。この度は、予想もしなかった星野眞吾賞をいただき、驚きと喜びで胸がいっぱいです。今後の制作において、大きな励みになります。本当にありがとうございます。



優秀賞 「underground stem」佐藤裕一郎(山形県山形市)



優秀賞 「生の記憶」三上研治(広島県大竹市)

## 「クールベ美術館展」を見て

宮本 昭義 (581)

今年7月30日から8月28日まで、豊橋市美術博物館で「クールベ美術館展」が開かれた。

「岩に囲まれた画家とモデル」は、クールベが郷里オルナン(フランス東部の田舎町)からブザンソンに出て文豪ヴィクトール・ユゴーの生家に下宿しながら王立中等学校に通っていた18歳の作品である。岩石の堂々とした量塊感と迫力、上方に透けて見える青空、そして手前に小さく描かれた画家自身と恋人。パリに出て、本格的に絵画の修行を始める前の作品であるが、既にリアリズムの巨匠ギュスターヴ・クールベ(1819~1877)を十分予見させる。

「聖職者会議物語」シリーズが面白い。特に、エッチングによる「聖職者会議からの帰り道」は本画が失われているが、当時の風俗が偲ばれる。背景の大きな木の幹に



聖職者会議からの帰り道

聖母の像が刻まれている。その前を右から左へ愉快な一行がやってくる。毎週月曜日、各僧院宅で順番に催される宗教会議の帰り道である。この

会議では宗教、道徳、歴史などの諸問題が取り上げられ、しばしばご馳走が出た。酔っ払った聖職者達の一行である。肥った僧院長がロバに乗っている。ロバの足は重さで地中にめり込んでいきそうである。左やや離れたところで、農夫が一行を見て腹を抱えて笑っており、妻はひざまづき両手を合わせている。一行のうしろには、町から買い物帰りらしい女性達が籠を持って笑いながら続いてくる。作者、43~44歳の作品であるが、墮落した聖職者に対する庶民の反感を広く訴えたかったのだろう。彼は、この絵がサロンで一大センセーションをまき起こし高値で売れるものと確信していたが、結果は全く逆だった。サロン当局は作品の主題が僧侶の名誉を傷つけるもの、宗教道徳を冒瀆するという理由で受け付けてはくれなかった。

「シヨン城」激動する時代の波に翻弄され、刑期を終えてなお、祖国フランスを追われ、病苦と失意のなか亡命先スイスで没する3年前、一時でもこのような悟りにも似た平和な心境があったことに、ほっと安堵の思いがするるのである。

## ミニコンサートの夕べ (参加者 130名)

平成17年8月2日(火)午後6時より  
豊橋市美術博物館玄関エントランスロビーにて

クールベ美術館展開催によせて、8月2日の夕刻、会員である大竹広治さんの演出と解説で、画家ギュスターヴ・クールベと同じ時代、同じ地で活動していた19世紀フランスの音楽家達の曲によるミニ・コンサートが催されました。

クールベより1歳年上でパリの作曲家グノー(1818~1893)の代表作「アヴェ・マリア」を田辺菜美子さん(ソプラノ)の歌でコンサートは始まりました。続いて、クールベと同じくスイスに亡命したフォーレ(1845~1924)の作品から、「子守唄」と「シリエンヌ」を尾崎今日子さんがフルート演奏されました。

そして、クールベが「シヨン城」を描きあげた年に完成したビゼー(1838~1875)のオペラ「カルメン」より「もう忘れはしない」を再び田辺さんのソプラノ独唱で。また、クールベの写実主義は、後の「印象派」を生み出していくことになるのですが、音楽の「印象派」の代表作とも言われるドビュッシー(1862~1918)の「月の光」を杉浦雅子さんがピアノ演奏。最後は女性作曲家シャミナード(1857~1944)のフルートの名曲「コンチェルティーノ」を尾崎さんに演奏していただき、正にクールベと同時代の音楽の世界に浸る優雅な50分間を過ごしました。



左端:演出及び解説・進行の大竹広治さん  
中央左:田辺菜美子さん(ソプラノ)中央中:尾崎今日子さん(フルート)  
中央右:杉浦雅子さん(ピアノ)

### 視聴者アンケートより(感想)

- ・演奏者との距離が近くて、鳥肌が立つくらい感動しました。
- ・入口近辺でスタッフがソワソワした動きが多く、演奏者が集中できなかったのでは?
- ・ホールではなく、目の前で生の演奏を聴けたのは迫力があり、すばらしかったです。
- ・曲間での大竹氏の解説は、各曲がなお興味深いものになりました。
- ・壁に投影されたスライドと相まって、フルートの演奏はフランスの波の音、風の音が聞こえるようでした。

## 豊橋市制施行100周年記念事業 築城500年記念展

# 吉田城と城下町

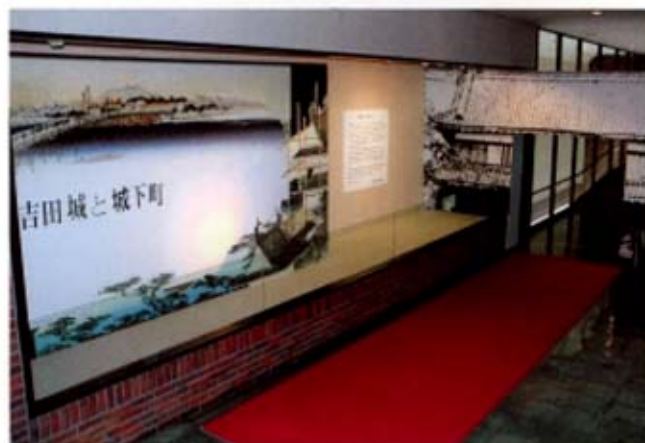
10月30日(日)まで開催

開館時間●午前9時～午後5時

会場●豊橋市美術博物館2階展示室

主催●豊橋市美術博物館

後援●NHK豊橋支局



会場入口・大手門をくぐって展示室へ



第1室・床の写真で城の領域を確認

吉田城の歴史は、永正2年(1505)、今川氏の家臣であった一色城(豊川市牛久保町)城主の牧野古白により、その前身である今橋城が築かれたことに始まります。本年

は、築城から500年を迎える記念する年です。これを機に現在、美術博物館では「吉田城と城下町」と題した展覧会が開催されています。ここでは、本展の見どころを紹介します。

本展では、4つのテーマに分けて展示が構成されています。第1展示室では、「絵図から見る吉田城」として、吉田城絵図を中心に30点の資料を展示しています。城絵図は描かれている内容により6種類に分類されますが、江戸時代の吉田城が現在のどこに該当するかを床面に現在の航空写真を貼り対比させています。第2展示室では、「吉田城の考古学」とし、過去23回にわたり実施された発掘調査により得られた出土品を中心に展示をしています。なかでも、藩士屋敷地であった愛知県東三河事務所建設地の調査で出土した陶製の井筒を往時の井戸屋形を復元して紹介しています。是非とも井戸屋形に上がって井戸の中を覗いてください。何が見えるか、見てのお



第2室・井戸の底には…

楽しみです。第3展示室では、「浮世絵・描かれた吉田」とし、28点の浮世絵版画を展示しています。幕末期に歌川広重の「保永堂版東海道五拾三次」がヒットすると、東海道の風景版画を各絵師がこぞって描きました。吉田の画題は吉田橋と吉田城がセットで描かれることが多く、色々な角度から吉田が描かれました。それぞれを見比べても楽しいでしょう。第4・5展示室では「吉田城下町」と題して、城下町の様子を紹介しています。吉田の城下町は、東海道五十三次の宿場町であるとともに吉田川(現在の豊川)舟運や伊勢湾航路の湊町として繁栄した複合的な機能を持つ地方都市でした。これらの町の様子を、屏風・絵図・古文書などにより展覧しています。また、「城下町の賑わい」として天王祭(祇園祭)や鬼祭など城下でとりおこなわれた祭礼や芝居など、盛り場として賑わった吉田を見ることができます。

本展では、吉田城と城下町に関する資料がさまざまな視点で展観することができるようになっています。興味のわくテーマで関心を深めてください。



第5室・赤鬼がお出迎え

## 陶器に想う

木下品代 (1300)



陶器をいとおしそうに箱から出し入れする母を見て、学生時代は冷やかに眺めていたものです。その私が今、陶芸の魅力にすっかりはまることになり不思議な思いがします。

愛知万博を記念しての「桃山陶の世界」(於：瀬戸陶磁資料館)は見応えのあるものでした。中でもひととき私の目を引いたのは高麗茶碗「青井戸」です。きりっと締まった竹節高台、口から胴にかけてのゆったりとした饅頭目は作り手のおおらかさが感じられるようでした。心ゆくまでながめた後、数メートル離れ、ふと振り返ってみると、そ

こにはライトアップされた美しい姿の茶碗が浮かび上がっていました。それは全体のバランスがいかに大切か、ということ私に教えてくれるものでした。肌合い、色、造り、手の中にしっくりとおさまる感じ……そんな事ばかりにとらわれていた私には新しい発見でした。時には距離をとって陶器と対話する事の大切さに気付く事が出来、嬉しい収穫でした。

一生懸命のあまり自分の作品が見えなくなる危険もあるようです。不出来ゆえ人前に出せない作品群、私にとってはどれもいとおしく、戸棚の中に大切に鎮座しています。

「憧れの茶碗」に向けての私の挑戦は続きます。

## 気

大竹広治 (1259)



素敵な芸術に触れた時、その作者の気と繋がったと感じた時、鳥肌が立つ程感動することがあります。

芸術から感じるもの、感じたいもの、それは「気」です。気という何か妖しげな事を感じる方も多いと思いますが、日本語をよく観察していただくと日本人が如何に「気」と共に生活して来たか、そして感じる事が出来る民族なのかを垣間見ることができます。

気がのんびりして楽をしているのは気楽、気がよく動く気転、気が病んで病気、その人の気持ちの色である気色、

何かをやり遂げるには持ちこたえられるだけの気力が必要ですし、その他にも気合、気軽、勇気、気鋭、などなど気に関する言葉はたくさんあります。

音楽を奏でる時、気を一番に大切にするように私は心掛けています。音程よりも気を大切にしていると言っても過言ではありません。気の抜けた音楽はどんなに音程が良くても芸術で無いばかりか、時には暴力的な騒音になり、聴者の気を破壊してしまいます。

あるフレーズを弾く時にどの気を表に出すか、それまで積み重ねてきた気の引き出しが多くなければ何も表現できません。様々な感情と共に流れる気を冷静に観察して引き出しにしまう根気のいる作業が大切です。完成した芸術になる事はあり得ない常に葛藤の世界ですが、命ある限り気長に向き合っていくつもりです。

## 私の原点と美術館

松井香奈枝 (971)



私が美術を初めて意識したのは、他でもなく、父と母に連れていってもらった豊橋公園で「絵描きさん」を見かけた時です。美術博物館の噴水の前で、ベレー帽にスモック姿でキャンパスに絵を描く姿は、幼い私にはかなりの衝撃でした。そのピースフルなでたちを「カッコいい!!」と思ってしまった私は、

それからお絵描きが大好きになりました。

それから20年。「絵描きさん」の道からは少し外れてしまいましたが、アートに少しでも関わりたいと思い、「sebone (せぼね)」というアートイベントの実

行委員をさせて頂いています。この活動を通して、この街でご活躍されている沢山の作家さん、そして美術に携わる様々な方の想いに触れさせて頂くことができました。まだまだ勉強していく事は山積みですが、少しでも多くの人と、表現することの楽しさ、創作の楽しさを共有していきたいと思っています。

幼少より影響を受けた美術博物館も、数年後に新館建設予定とか。今からとても楽しみです。美術館は普段出向かない人には少し入りにくい空間です。より多くの方が、自分の好きな音楽を楽しむように日常的に、アートを楽しむことができるそんな美術館になることを心から期待しています。

## 初の親子鑑賞ガイド

平成17年7月23日(土)~8月27日(土)

## 夏休みの思い出作りのお手伝い

収蔵品展「顔」「中村正義の顔」開催中の夏休み、毎週水・土曜日、主に子供たちを対象としたギャラリーガイドがボランティアの皆さんによって交代で行なわれました。

## ● 夏休みキッズガイドを終えて

今回は、今までのように作家や作品説明を主体にするのではなく、「子供と一緒に作品を楽しむつもりで」と、事前研修を受け、「楽しかった」「自分も参加したんだ」と感じてもらう事を目標に取り組みました。

担当した7月30日(土)は、子供7人を含む15人程の参加者で始まり、私達は進行役と補助役のペアを組み、まずは自己紹介と美術博物館でのマナーの話、次に子供達の名前を聞き、「好きな絵は?」「どこが好き?」とコミュニケーションを取りながら進めました。思った事・感じた事を元気に話す子供たち。あっという間に時は過ぎ、終わってみれば30人程のギャラリーになっていました。帰りがけに「又、このような機会を・・・」の一言にホッとした私達です。

彦坂 陽子 (253)

小学1年生のみさきちゃんと4年生のひとみちゃん姉妹が参加してくれました。

はじめは、ちょっと恥ずかしそうにしていた二人ですが、「この絵の中に顔がいくつあるかな?」の質問にすぐ「一つ、二つ・・・」と数えたり、ワークシートにある「私はどこでしょう?」の顔探しでは、競うようにして探してくれました。平日の水曜日ということで参加人数は少なかったけれど、一緒に楽しむことの出来た30分でした。

田代 晴美 (599)



ワークシート表紙

ベビーカーに乗った愛らしい子とその若い両親・仲睦まじく寄り添う中年のご夫婦に、キッズ向け用のパンフを使用してのガイドに少々戸惑いながらも、「子ども向けに話します」と美術館のマナーから始める。そして、作画の手法や材質・作品の時代背景などへの細かい質問に、居合わせた先輩ガイドの知識に助けをもらう。ちょっとした美術談義になり 楽しいひと時となる。「この子を美術館になじませたい・・・」と嬉しい言葉を頂いた。

鈴木 眞理子 (523)



2階第4展示室の様子



同じ顔はどれかな?

## ● 来年にむけて

市制100周年記念展として、本館収蔵品展1,000点余りの中より厳選作品が全館に展示される予定です。私達は作品と作家と来館者の橋渡しの為に個性豊かで楽しいギャラリートークを目指し日々研鑽しております。 芳賀フサ子(1387)

## 収蔵品紹介

## [吉田藩士屋敷図]

128.0cm×231.0cm



840,000 m<sup>2</sup>、約 25 万 5 千坪に及ぶ広大なもので、東京ドームの 18 個分であった。

藩士屋敷は、藩から貸与される住居であり、いわば現在でいうところの官舎であった。したがって、その修繕は藩士が自ら勝手に行うことは基本的に認められておらず、藩士屋敷の増改築・修繕を担当した普請奉行の管轄の下でとりおこなわれた。

吉田川（現在の豊川）を背景に、本丸・二之丸・三之丸が半円郭式をなす吉田城と、その外郭に藩士屋敷、さらに総構えの西南に町地、そして東海道が東西に通っている。城内の櫓・門・番所・蔵等を鳥瞰図風に描き、町地の寺社も宗派・山号を書き入れ、特に藩士の屋敷割は藩士名とともに各屋敷ごとに面積坪数を記入している。彩色は、吉田川と堀を藍、土居・土堤を緑、寺社地を朱、吉田橋と道路を黄で精写している。堀は吉田川と同じ藍色で描かれていることから、水堀であったと思われるが、三之丸以内の堀はすべて空堀であったことが確認されている。また、藩士屋敷と町屋を仕切る総堀は、承応 3 年(1654)に城主であった小笠原忠知が向山大池を築いて水を引き、これ以後は水堀となった。

吉田城の城域は、東は現在の飽海町から旭町、南は曲尺手町から呉服町、西は関屋町に達するおよそ

藩士屋敷の中では、悟真寺の前から柳生門まで続く八丁小路のうち、特に門の近くや角地には千坪を越える大きな区画の屋敷地があり、家老や中老など家禄の高い藩士の屋敷があった。また、藩士の中でも最下層の足軽が居住した屋敷は、藩士屋敷とは塀と堀で区別された城外の東西 2ヶ所に置かれていた。

本図は、普請奉行である染矢兵左衛門が記した「吉田藩普請奉行日記」(『豊橋市史々料叢書』第 5 集)などの史料より、弘化 2 年(1845)ないし弘化 3 年に制作されたことがわかる。

(豊橋市美術博物館学芸員 和田 実)

「吉田藩士屋敷図」は、10月30日まで  
築城500年記念展「吉田城と城下町」(2階展示室)にて公開中です。  
どうぞこの機会をお見逃しなく。

## 編集後記

- 今年度の風伯編集に関する意見交換が7月16日に行われ、これから友の会を発展させ、美術博物館と会員相互の間を繋ぐ要として、どんな風伯にしたらいかが話し合いました。企画展などに併せて前もって解説を載せて欲しい、会員の自由な声、豊橋の文化として歴史的なことを掲載してほしい、学校の先生生徒に参加発想してもらおうページを作りたい、など沢山の意見がありました。

また豊橋市美術博物館設計者選定手法等検討座談会では美術博物館整備事業の経緯の説明があって、住民参加型によるプロジェクト支援活動としてワークショップの開催など質疑応答がされました。私は新美術館建設に対して、是非、市民参加の美博であってほしいと願っています。

風伯の編集にあたり、各号を担当する編集員が決まり、此の号の編集委員会が開催されて皆さんの意見が少しでも取り入れられるように話し合いがされました。今までとは何処か変わったなと思われ、皆さんに喜んで頂けるような風伯にしたいと編集委員一同頑張っている所です。どうか今後とも皆さんのご意見・ご感想をお寄せ下さい。

(前田 尚洋)